

# 谷口建築にみるモダニズムと日本建築の要素

能勢陽子

1978年の資生堂アートハウスにおいて、美術館建築から仕事を始めた谷口吉生は、その後も土門拳記念館(1983年)、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(1991年)、豊田市美術館(1995年)、東京国立博物館法隆寺宝物館(1999年)など、美術館・博物館建築を中心に手掛けていくことになる。国内における建築ばかりであった谷口が、世界的に注目されることとなったのは、1997年にニューヨーク近代美術館(MoMA)が実施した増改築のための国際招待コンペティションで、見事指名を獲得してからのことである。MoMAの増改築にあたってのコンペティションには、谷口のほかに、アメリカからバーナード・チュミ、ラファエロ・ヴィニョーリ、トッド・ウィリアム&ピリー・ツィン、スティーヴン・ホール、オランダからウィール・アレツ、レム・コールハース、フランスからドミニク・ペロー、スイスからヘルツォーク&ド・ムーロン、日本から伊東豊雄と、世界中で活躍する10組の建築家が選ばれていた。谷口のコンペティションへの参加はこの時が初めてであり、海外における建築がなかったにも関わらず、最終的に谷口のプランが選ばれたことは、当時大いに話題となった。まず谷口が増改築を行ったこのMoMAが、20世紀以降の建築界にもたらした影響についてみてみたい。

## 1. MoMAの美術館建設、増改築の歴史

MoMAは今回のものを含め、これまで4名の建築家による美術館建設、増改築を行っている。当時の美術館はヨーロッパの伝統的な芸術しか扱おうとせず、近代美術のコレクターは上流社会のほんの一握りであった。そこでモダンアートを愛する3人の女性コレクターが立ち上がり、1929年にタウンハウスの中にモダンアート専門の美術館を立ち上げたのがMoMAの始まりである。このタウンハウスが、その後世界中にできる近代美術館の第一号となる(図1)。若干27歳で初代館長に就任したアルフレッド・バー・Jr.は、ドイツ、バウハウスの絵画、グラフィック、建築、工芸、タイポグラフィ、舞台芸術、映画、写真、工業デザインの多部門からなる芸術学校に感銘を受け、それを美術館構想に持ち込んだ。そして、バウハウスのモダン建築による施設を絶賛した。それまで美術館が、絵画、彫刻、デッサンといった従来のオーソドキシシーののっただ分類法を取っていたのに対し、MoMAの多部門からなる美術館は、当時極めて斬新なものであった。

美術館における建築部門の設立は、MoMAが初めてであった。1930年には、バーの命を受けて、建築部門部長フィリップ・ジョンソンとヘンリー・ラッセル・ヒッチコックによる初の建築展、「近代建築-国際」展が開催される(図2)。本展において掲げられた「インターナショナル・スタイル」は、1920年代のヨーロッパで流行していたル・コルビュジェ、グロピウス、ミース・ファン・デル・ローエらの機能主義建築の特徴を、「ヴォリュームとしての建築」、「規則性」、「装飾付加の忌避」の3点に要約し、それを新たなモダニズムの建築理念として提示したものである。「近代建築-国際」展には、

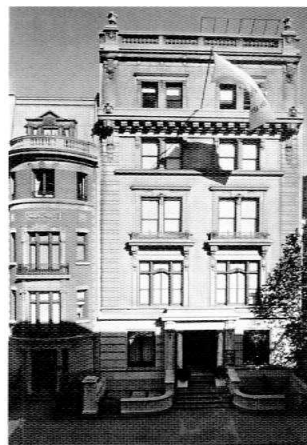


図1



図2  
「近代建築-国際」展 展示風景



図3  
グッドウィン&ストーンによる新館



図4  
フィリップ・ジョンソンによる東ウイング



図5  
シーザー・ペリによる庭園棟

ヨーロッパ以外にも、フランク・ロイド・ライトなど総計15カ国40名の建築家が選ばれており、日本からは山田守が参加していた。本展において、それまで新建築や合理主義建築と呼ばれていた一潮流に、様式としての名前が与えられた。そして、このアメリカ発の建築原理、「ヴォリュームとしての建築」、「規則性」、「装飾付加の忌避」は、以後世界中の建築に影響を与え続けることになる。

バーは展覧会カタログの序文の中で、以下のように述べている。

本書は彼らの結論を表明したものであるが、それはわたしからみると並々ならぬ、おそらく画期的な重要性をもつもののように思われる。というのは、いかなる筋の通った疑問をも越えて、過去のいかなる様式にも匹敵する独自性と一貫性と論理性と広域性をもった近代様式が、今日存在することを彼らが証明した、と私は信ずるからである。著者たちはそれを「インターナショナル・スタイル」と呼んだのである<sup>1</sup>。

ヨーロッパでは反アカデミー的な運動であったこの一傾向が、MoMAという機関によりオーソライズされ、世界中に広がっていく。もっともその後、提唱者であるヘンリー・ラッセル・ヒッチコックは、1963年に出版した書籍の中で、「インターナショナル・スタイル」は終わったと告げることになるのである<sup>2</sup>。

建築部門は、「マシンアート展」、「パウハウス回顧展」など、斬新な企画を次々と打ち出して、建築・デザイン概念の発信拠点となっていった。MoMAは、建築、デザイン、映画など、これまであまり紹介されてこなかった分野を扱い、そのパイオニアとなった<sup>3</sup>。また、なにより近現代美術の歴史にその重要性を刻印することとなったのは、MoMAがまさしくヨーロッパからアメリカへといたる美術の中心の変化の舞台になったことがあげられるだろう。

コレクションの増加、芸術の媒体の変化、時代を経るに従い巨大化していく作品の要に迫られ、MoMAはこれまで、建物の建設、増改築を行っている。まず1939年に、タウンハウスから現在の53丁目に引っ越し、ここにグッドウィン&ストーンによるモダニズム建築の美術館が誕生する(図3)。石造建築による家並みの中で、ガラスの壁に覆われた白大理石の箱のような6階建ての建造物が、当時いかに斬新なものであったかがわかる。ここに、近代芸術がモダニズム建築に展示されるという図式が出来上がるのである。

1964年には、「インターナショナル・スタイル」の提唱者であるフィリップ・ジョンソンによる増築が行われ、東ウイングが出来上がる(図4)。垂直線が強調された黒いフレームは、グッドウィン&ストーンの白大理石と好対照をなし、また隣のゴシック教会の垂直に伸びるファサードも参照して考案された。

1984年には、3度目の増改築となる、シーザー・ペリによる庭園棟、56階建ての高層住宅棟ミュージアム・タワー、6階建ての西棟が増築される(図5)。ペリの増改築に

